

Arjun Appadurai *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1996, 229頁

(アルジュン・アパドゥライ著『未捕捉の近代：グローバリゼーションの文化的次元』)

諏 訪 淳一郎

ヨーロッパ文化と地域文化の対話、あるいは地域文化間の相互理解を目的の一つに掲げてきた文化人類学は、これまでのような固定化した「文化」概念によらない複数のアプローチを構築する途上にある。ここでは「高貴な野蛮人」や未分化な「土着文化」の存在は疑われ、植民地化と近代化の荒波に「抵抗」し「自文化アイデンティティ」を主張する「サバルタン」の姿も複雑な色合いを帯びる。民族誌の古きよき時代は、高度情報化社会と市場経済の波のなかで記号化され、脱権威化され、「文化の政治」の彼方へ洗い流されつつあるだけでない。「文化とは民族誌的コレクションである」(Clifford, 1888: 230) といみじくもクリフォードが言ったように、現代における「文化」とは植民地と人類学の密接な関係によって始めて成立しえた虚構としての側面さえも併せ持っているのである。こうした自覚に立ったとき、民族誌はどこへ向かうべきなのか、という問いを発し、自ら受け止める論考が1990年代に入ってようやく現れ始めた。

本書は、南アジア地域研究を専攻してシカゴ大学で教鞭をとる文化人類学者のアル

ジュン・アパドゥライが、過去6年間に執筆した論文を一冊にまとめたものである。略歴によると、著者はボンベイのブラフマンの家庭出身で、アメリカで高等教育を受け、アングロ＝サクソン系アメリカ人の妻との間に子供がおり、イギリスのアクセントを交えた英語を話す。著者がわざわざこのような私的な領域から本文を語り起こすのは、自身を「ポストコロニアルな主体」(第1章)と位置付けながらグローバリゼーションの抱える諸問題について文化人類学の立場から考察するためであるが、各章の大半は理論的考察によって占められている。著者が本書で繰り返す国民国家以降の社会像とは、国民国家(nation-state)のネーションとステートを分離する社会である。そこでは国家としての領土を持たないネーション(亡命政権、難民キャンプ、原理主義的な共同体など)や国民としての自己意識が不在な国家(移民、越境者、ゲストワーカー)が林立し、発達しつつける電子媒体と複雑に絡み合いながらフローを生み出す。

第1章 Here and now (いま、ここ) は、本書全体を通底するテーマを概説する。グローバリゼーションは、人、モノ、資本、情

報などの移動と、電子メディアの世界的展開という二つの側面として特徴付けられるが、これらは同時進行的に絡み合い、その先行きは予見しがたい。加えて電子メディアは遠隔地の出来事に同時進行で反応することだけでなく、日常生活のなかで想像力を自由に展開することも可能にした。この状況下で行動を生起する最大の力は、ディアスポラが日常化した現在において人々にあたる神話を提供している想像力である。これを「情の共同体」と名づける。また、想像力は差異を具現化するので、グローバル化は、文化の標準化や均質化をもたらさない。むしろ、国境を越えたトランスナショナルあるいはポストナショナルのつながりのために、域内の文化的均質性を希求する国民国家に反して無数の断裂を生んでいる。

第1部 Global Flows (グローバル・フロー) では、グローバル化の特性と諸側面を掘り下げている。第2章 Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy (グローバル文化経済下の分離と差異) は、グローバル化の同一化と差異の構造が、国民国家によって作り上げられた「文化」の創出に根ざしていることを論ずる。国民国家は、博物館などのコレクションによって、家族や世代の系列からそれぞれの過去を分離し、集団の「文化」や「伝統」を表象することに成功した。しかし、そうやって創出された「文化」は、空間を隔てた不特定多数の聴衆に対して自己を正当化するために意識的かつ状況的に選択する対象として、今では国民国家の枠組みから放たれたエスノスケープ (民族、日常性)、メディアスケープ (媒体、情報)、テクノスケープ

(技術、技能)、ファイナンススケープ (資本、財)、イデオスケープ (思想、宗教) の諸界がもたらす流動性の只中にある。

第3章 Global Ethnoscapes: Notes and Queries for a Transnational Anthropology (グローバル・エスノスケープ: トランスナショナル人類学へのノートと課題) では、文化本質論が批判され、エスノスケープにおける内面化された集団の系譜 (ジェネオロジー) ではなく、異なる系譜を持った文化的他者との拮抗に注目する歴史 (ヒストリー) の視座を備えた民族誌的研究を提案する。このあらたな民族誌は、グローバル化し境界を失った世界における生活感を持った地域性や、コスモポリタニズムのなかで電子メディアに触発された想像力と人や情報、技術、資本、思想の移動が社会生活に与える影響を扱うことによって、コスモポリタニズムにおける諸相の解明を目的とする。

第4章 Consumption, Duration, and History (消費、期間、歴史) では、消費社会の想像力に焦点をあてる。消費は習慣化した反復的な身体技法であることから、個人的な側面と規範化した社会的な側面の二面性を秘めている。ここに身体的なものが歴史的なものへと変換される回路がある。アメリカのクリスマスセールでは買い物のタイミングがクリスマス自体の過ごし方と不可分であるように、消費される贈与物は、よくいわれるような通過儀礼に付随した象徴ではなく、むしろ消費の周期が儀礼の時間を定めている。一方、インドの植民統治下にブラーフマナが西洋の帽子を被る慣行を創出したように、消費の周期性が作る歴史は長期的に見ると単なる繰り返しではない。一方、消費革命がもたらした流行の本質は、商

品のパティーナ（古色）に特徴付けられるブルジョワジーの骨董志向から生じたノスタルジアと、「儚さ」である。ノスタルジアが販売戦略の対象となるにつれて、消費者の想像力は自身の体験とは関係なく商品と広告宣伝から喪失感を受容するという、集合的記憶をもたない「想像のノスタルジア」を形成している。

第2部 Modern Colonies（近代植民地）に収められた第5章 *Playing with Modernity: The Decolonization of Indian Cricket*（近代を遊ぶ：インド・クリケットの脱植民地化）と第6章 *Number in the Colonial Imagination*（植民地的想像力における数）は、それぞれインドにおけるクリケットの土着化と植民地時代の人口統計をケーススタディーとして、植民地の近代について論じている。現在のクリケットはインドの国技になっているが、それは身体の快楽にスポーツメディアと「インドらしさ」が結び付くことによって、インドの近代化の手段として全国に広がった結果である。人口統計の作用は植民地の領土を表現し、鳥瞰するところにあったが、その影響はタイポロジーの創出よりも主体から個性を奪って人の集団を数として数えることで、イスラム対ヒンドゥという宗教上の対立構造を醸成し、ガンジー暗殺のような事件として歴史に大きな影を落とした。

第3部 Postnational Locations（ポストナショナルな場所）所収の3章は、国民国家に関わる考察である。第7章 *Life after Primordialism*（初源主義以降の世界）では、ジャーナリズムの意に反して、民俗社会や宗教原理主義は地域紛争の真の原因ではないことを論じる。感情は初源的なものとい

うより、社会状況に裏打ちされ、学習されるものであり、暴力をもたらし地域的な感情は、複雑な相互作用の結果である。民族紛争や暴力は前近代的な何かの爆発ではなく、グローバルな流れにローカルな社会が押しつぶされる「内破」（インプロージョン）である。民族紛争では、例えば相手が同じセルビア人ではなく実はムスリムだったというような、親密感を裏切られた感覚が原動力となっている。こうした感覚の根底には、文化的他者を排除する国民国家の「文化主義」があるが、移動と電子メディアによって境界があいまいとなっている現実との落差によって、暴力をもたらし原因となっている。同様に、被支配集団と支配集団との対話は、前者が民族意識から「その国の一部」を要求することによって不可避免的に紛争に発展する。

第8章 *Patriotism and Its Futures*（愛国心とその未来）は、国民国家以降の社会を論じる。国民国家においては、市民は自分たちを言語、血、土地、民族の固有性のなかに想像する。しかし、移動（移民、海外就職、難民、亡命）によってポスト植民地国民国家の根底をなす愛国心が領土と関係なく分布し、両者の境界は一致していない。例えば、移民たちはアメリカ文化にあこがれることはあっても、「何々系アメリカ人」というマイノリティーであり、合衆国に愛着を持つとは限らない存在になる。国民国家モデルの終焉は、国民国家に代わる資源やイメージやアイデアの組織化、領土国家に関わらない「ナショナル」としての帰属意識によってもたらされる。

第9章 *The Production of Locality*（ローカリティの産出）では、ローカリティ（社会

生活のアспект、コンテクスト、価値、現象)と近隣(局所的な社会コンテクスト、実体的な空間)という二つの概念から、トランスナショナルな状況について考察する。儀礼によって生成されるローカリティは「ネイティヴ」を作り出す。その目的は、感情をネイティヴなものとして構造化することによって物質的な効果をもたらすことであった。儀礼は本質的に不安定なローカリティの消滅をおそれて繰り返されるが、旧来の民族誌はこの繰り返しを見破ることができずに、ローカリティを一定不変のものとして権威化し、国民国家が「文化」なるものを錯認する一因を作った。一方、ローカリティを産出する近隣の役割は、外部のデモニックなものと自分たちの世界とを分離してコロニー化することであり、未知の領域に踏み込む恐怖は儀礼の反復に追体験される。境界消失の時代では、国民国家は領土、主体、集団社会行動間の乖離と電子メディアの発達によるバーチャルな近隣の双方に侵蝕され、ノスタルジア、祝祭、追悼式、マイノリティーのローカル化といった方法による近隣の維持管理が危うくなっている。

さて、本書はグローバリゼーションが抱える諸問題を地域研究の俎上に乗せる目的をもちながらも、むしろ従来のように文化を実体のように扱う欠陥を回避し、国民国家を単位としたアイデンティティの政治学が作り上げてきた議論(著者の言う「文化主義」)からの離陸にむしろ重点が置かれている。世界的な秩序の構築を希求してきた植民地主義と第二次大戦以降のアメリカに対する著者の批判は、とくに第1章の文化主義批判と第7章の啓蒙主義批判の基本を

なす「内破」説において明らかなおりである。グローバリズムを支えてきた植民地主義的世界秩序には構造主義や実存主義が対抗する視座として台頭したが、新しい潮流である現在の文化主義による秩序が内包する矛盾は、サイドやクリフォードらによっても指摘されてきた。この意味で、本書中の数々の示唆は興味深い。

しかし、言説化された「文化」を選択的に用いることは、新しい行動様式ないし思潮となった瞬間、それも創出された一つの文化—ディアスポラ文化—として記述される宿命にある。加えて、選択の余地の少ない同一性(クルド人、パレスチナ人)もあれば、愛国主義(アメリカ)も依然としてある。つまり、選択され創出される客体としての文化は、こうした文化選択の不自由の反転映像であったり、利用の様式であったりするわけで、この状況を解明するためには、著者も指摘するように、「我々の(彼らの)文化」として文化本質論のなかで語られる「文化」(著者のいう *culturalism*)ではなく、「文化的なもの」(*the culture*)に焦点を当てる方法論が必要となる。この文化的なものとは、生活世界のいかなる局面においても暗黙知として培われているはずであり、ここに更なる考察の余地が残っている。この考察を通じてこそ、国民国家以降の文化的次元が浮かび上がってくるように思えるが、残念なことに、本書では文化主義が内包するこの袋小路を突き破る解決は明示されていない。このことは、本書中、鋭利に展開される理論的考察とは裏腹に、第2部の事例研究に共同体の想像の産物を大雑把に記述する以上のものが見られないところに逆説的に現れている。グローバルな

流れについて、一元的に捉えられない多層的な側面をもう少し強調する必要もあったのではないか。

ただし、こうした不足の点にも関わらず、本書の与える示唆は北東アジア研究においても活用できる。北東アジア学は、従来の地域研究の枠組みから離れてグローバルな射程のもとに行うのが望ましいこと、当該

地域において文化を数え上げるのではなく文化的なものの様態を捉えるべきであること、近代の衝撃を「情の共同体」のように国民国家の枠組みを超える想像力がもたらす動態の性格のもとに認識すべきであること、さらに、国民国家以降の文化的次元について考察すること、などによって方法論を深めていく上で貢献できるだろう。

## 引用文献

Clifford, James. 1988 *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.